



第三章

万国博覧会に出展された日本地図 — 世界に示された「日本」の形 —

第三章では、幕末から明治初期にかけての万国博覧会に出展された日本地図を見ていきます。

「官板実測日本地図」とパリ万国博覧会(1867年)※

文書
3

及び

地図
22

第2章で述べたとおり、1861(文久元)年7月、伊能小図が英側に貸し与えられましたが、同年8月、今度はオランダ側が印刷された沿岸測量図の贈呈を要請してきます。

江戸幕府は、手元に伊能図の余部がないので彫刻するように関係部署に命じ、出来次第贈呈するとオランダ側に回答。伊能図の刊行を決意します。

伊能図彫刻を命じられたのは、当時、世界地図や蘭書の翻訳、出版検閲などを行っていた**蕃書調所**(後の開成所)でした。しかし、蕃書調所は、印刷地図が外国にも渡されることを考えると、その記載範囲との関連において、対外的に不都合が生じかねないとして、幕府中枢に意見を求めます。

幕府内での議論の結果、伊能図でカバーされていない地域のうち、地図に記載がないことによって外国との関係で不都合が生じかねない地域については、精細な地図などを用いて補完した地図を作成することになりました。これが「官板実測日本地図」です。この地図は「日本の歴史のなかで、中央政権が初めて自己の支配下にある領域を対外的に表明する機能を有するとの明確な認識の元に作成された日本図」⁽¹⁾といわれています。

「官板実測日本地図」は、1867(慶応3)年、パリ万国博覧会に出品されるとともに、ナポレオン三世など欧州の要人に寄贈されました。



小冊子「人物と機関」
蕃書調所と開成所

(1) 杉本史子『絵図の史学:「国土」・海洋認識と近世社会』(名古屋大学出版会、2022年)95頁。

※この節の記述は、杉本史子『絵図の史学:「国土」・海洋認識と近世社会』(名古屋大学出版会、2022年)の「第6章 近代国家形成過程再考:海洋から見たジオ・ボディ」を主に参照して作成しています。

「大日本国全図」とウィーン万国博覧会(1873年) ・フィラデルフィア万国博覧会(1876年)

地図
23

～

地図
25

その後、明治政府になっても、万国博覧会における日本地図の出展が行われました。1873(明治6)年ウィーン万国博覧会及び1876(明治9)年フィラデルフィア万国博覧会には、当時太政官(現在の内閣に相当)におかれていた地誌部門(長は**塚本明毅**)が伊能図などを参照して作成した「大日本国全図」などの出展を試みました(フィラデルフィアについては間に合わず)。



小冊子「人物と機関」
塚本明毅

1 「官板実測日本地図」とパリ万国博覧会(1867年)(1)

地図
22

開成所「官板実測日本地図」(1865年以前)

この地図は伊能小図をベースに、地図が外国に渡ることを考慮して地図に記載がないことによって外国との関係で不都合が生じかねない地域を付け加えているよ。
そして、徳川昭武(徳川慶喜の弟)を長とするパリ万博使節団は、この地図を訪欧時に欧州要人に贈呈したんだよ！



実測諸島の
イメージキャラクター
アルパちゃん

パリ万博使節団には渋沢栄一が参加していたことが有名だね！渋沢はこの時の渡欧経験を杉浦譲と一緒に『航西日記』という本にまとめているよ！船内の食事の紹介などが面白いから見てみてね！



小冊子「人物と機関」
杉浦 譲・荒井郁之助



「官板実測日本地図」は、もともと幕府部内用・外交用だったんだ。1864年には軍艦操練所などに印刷したものが渡されていたよ。このパネルの地図は1865年以前のもので考えられるよ。
開成所メンバーは幕府に対し、届け出制で希望者に頒布することを上申したけど、残念ながら実現できなかった。
でも、開成所のメンバーは、幕府倒壊後、広く流通させることを目指してこの図の市販に踏み切ったんだ。さらにその後、開成所を接収した新政府は、開成所-開成学校を引き継いだ大学南校からこの図を出版し、政府の諸役所に配布したよ。新国家建設の礎となったんだね。⁽¹⁾

(1) 杉本史子「第5章 公開される「日本」：新しい海洋の登場と出版文化の変容」同「近世政治空間論：裁き・公・「日本」」(東京大学出版会、2018年) 及び同「第4章 新たな海洋把握と「日本」の創出」同「絵図の史学：「国土」・海洋認識と近世社会」(名古屋大学出版会、2022年)

所蔵：東京大学文書館
北蝦夷(樺太) 207.4×83.4 cm
蝦夷諸島(北海道) 157.0×196.9 cm
畿内 東海 東山 北陸 228.1×156.3 cm
山陰 山陽 南海 西海 195.0×141.4 cm

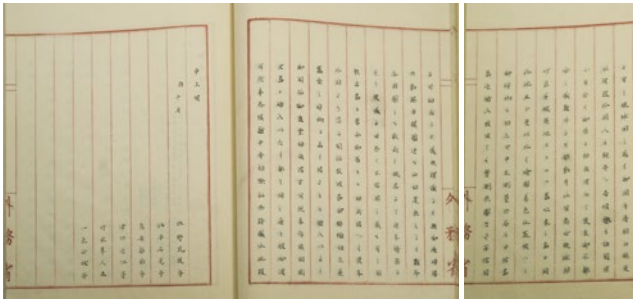


1「官板実測日本地図」とパリ万国博覧会(1867年)(2)※

文書
3

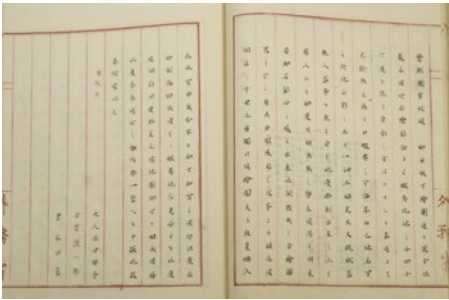
『続通信全覧』類輯^{るい しゅう}之部 文書門、地図、日本実測地図増補一件
（「官板実測日本地図」の作製過程での議論）重要文化財

1861（文久元）年10月外国奉行の意見



所蔵：外務省外交史料館

1861（文久元）年9月蕃書調所の意見



（大意）
伊能図については「蝦夷北地」（樺太）は北緯四十六度まで、その南東（の島々）については国後島まで、蝦夷（北海道）の地名の記載も海岸のみで内陸の地名は一切記載がなく、琉球島も無人島（小笠原島）も記載なく、彫刻が出来次第、外国人にも渡すはずなので今後不都合も生じないかと絵図を写す者が申ししており、もっとものことと思われるので、出回っている地図をもって地図を補足すべきか指示をいただきたい。

（大意）
伊能図については「蝦夷北地」（樺太）は北緯四十六度まで、その南東（の島々）については国後島まで、蝦夷（北海道）の地名の記載も海岸のみで内陸の地名は一切記載がなく、琉球島も無人島（小笠原島）も記載なく、彫刻が出来次第、外国人にも渡すはずなので今後不都合も生じないかと絵図を写す者が申ししており、もっとものことと思われるので、出回っている地図をもって地図を補足すべきか指示をいただきたい。



外国奉行の意見は、一部の地域に色を塗るというものだったけど、1862（文久2）年の樺太の国境をめぐる日露交渉で、ロシア側が地図の色分けは国境の証拠にならないと主張。色塗りは行われなかったよ。また、同交渉では樺太の国境は定まらず、結局、樺太全体が地図に記載されたよ！



この他にも勘定奉行及び同吟味役、外国掛大目付・目付などが意見を出したよ！勘定奉行及び同吟味役は、地図の付け足しは、実測図の意味がなくなるとして反対したよ！結局外国奉行の意見が採用されたんだ！

「官板実測日本地図」の作製過程での記載範囲の検討

島	伊能図	外国奉行の認識	「官板実測日本地図」
樺太	北緯46度以南記載	北緯50度まで「日本」付属	図面「北蝦夷」として樺太全体を記載
千島列島	記載なし	言及なし（色をつけて地図に掲載することを提案）	記載なし
北方四島	国後島のみ記載	国後島・択捉島全島「日本」付属 ^(注)	図面「蝦夷諸島」の一部として記載
小笠原島 （父島・母島）	記載なし	古来から「日本」付属と申し伝え	挿図内題として記載
琉球国	記載なし	日清両属と外国人も粗々承知	挿図内題として記載
鬱陵島	記載なし	元禄年間に朝鮮にお与えになった	記載なし

（注）歯舞群島及び色丹島について特に記載はないが、「官板実測日本地図」には記載があることを踏まえると、国後島・択捉島と同じく全島日本付属という認識と思われる。

※この頁の記述は、杉本史子「絵図の史学：『国土』・海洋認識と近世社会」（名古屋大学出版会、2022年）の「第6章 近代国家形成過程再考：海洋から見たジオ・ボディ」及び杉本史子「近世政治空間論：裁き・公・『日本』」（東京大学出版会、2018年）の「第5章 公開される『日本』：新しい海洋の登場と出版文化の変容」を主に参照して作成しています。

2 「大日本国全図」とウィーン万国博覧会(1873年)※

1872(明治5)年、静岡藩(旧幕府)の沼津兵学校の教授・頭取であった塚本明毅(旧幕臣(軍艦組))は、太政官正院(現在の内閣に相当)に抜擢、太陽暦への改暦と『皇国地誌』の編纂を提案、採用されます。地誌課が設けられ、塚本は責任者に任じられます。

同課に与えられた最初の大仕事が、ウィーン万国博覧会への日本地図の提出であり、伊能小図などを参照して「大日本国全図」を作成し、同博覧会で賞を得たとされます。

同図は、火災あるいは帰国中の船の遭難事故など何らかの原因で失われたと思われていますが、現地に派遣された製図師岩橋教章がウィーンで石版術や製図法などを学んで作製した石版の日本地図が残されています。

地図
23

公文附属の図・五五号「大日本全図(欧文)」(1873年)



所蔵:国立公文書館

この地図は「大変、現地の喝采を博した」と伝わるよ(田中芳男・平山成信編『奥国博覧会参同記要』(森山春雅、1897)214頁)。「1873年ウィーン万博」とのフランス語の表題を見ると、ウィーン万博にも出展されたのかもしれないね!



小冊子
「日本海の島々の
認識の変遷」

地図
24

文部省「日本全図」(1877年)

この地図は専門家により、同縮尺で2枚セットであるという点を含めて、ウィーン万博の出品図の地図に最も近いのではないかと指摘されているよ!⁽¹⁾

(1) 鈴木純子「伊能図利用の軌跡」『地図』56巻1号(日本地図学会、2018年)16頁



所蔵:京都大学吉田南総合図書館
東部及び西部ともに232×170cm



<https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/yoshidasouthlib/>

※この頁は、島津俊之「明治政府の地誌編纂事業と国民国家形成」『地理学評論』第75巻第2号(日本地理学会、2002年)及び鈴木純子「伊能図利用の軌跡」『地図』第56巻1号(日本地図学会、2018年)などを参照して作成しています。

③「大日本国全図」とフィラデルフィア万国博覧会(1876年)※

地図
25

太政官修史局地誌掛「大日本国全図」(1876年)



所蔵:東京大学史料編纂所 76.4×73cm 画像提供:日本国際問題研究所



この地図は、製図師が病気になるてしまい、フィラデルフィア万博には間に合わなかった⁽¹⁾けど、1876(明治9)年12月に完成したよ!

(1) 鈴木純子「『赤門書庫旧蔵地図』の『陸図』群:概要と特色」杉本史子編『近代移行期歴史地理把握のタイムカプセル「赤門書庫旧蔵地図」の研究』(東京大学史料編纂所、2015年)14頁

フィラデルフィア万博には、日本の海図が初めて54点出展されたよ! 明治に入ってから海図作製の歴史については第4章と第5章を見てね。



世紀の大発見「赤門書庫旧蔵地図」 —屋根裏にあった「タイムカプセル」—

この地図や地図19・21などは、東京大学の「赤門書庫旧蔵地図」と呼ばれる約700点の地図群の一部だよ! 2009年に赤門書庫をレストランに改装することになり、所蔵資料を調査したら、いっぱい新しい史料が見つかったんだ!! これらの地図群は地図研究の進展にとっても貢献したんだよ!

これらの史料の多くは、内務省地理局地誌課(旧太政官正院地誌課)が所蔵していたもので、東京大学史料編纂所は、内務省地理局地誌課の後継組織だから、これらの史料が東京大学にあったんだよ!!



※このページの記述は、『東京大学史料編纂所研究成果報告2014-3 近代移行期歴史地理把握のタイムカプセル「赤門書庫旧蔵地図」の研究』(科学研究費補助金・基盤研究(C)「近代化模索期の『国史』編纂と地図作成—赤門書庫旧蔵地図の研究」(24520737)・東京大学史料編纂所画像史料解析センター「赤門書庫旧蔵地図プロジェクト」(両代表:杉本史子) 合同報告書)を主に参照して作成しています。



第四章

英国の支援を受けつつ自力測量技術の確立を目指した明治日本※

明治政府は海軍の強化を図る一方、海図作製事業の重要性も認識し、津藩の柳橋悦と田辺藩の伊藤雋吉を招請。両名は1870（明治3）年に出征します。

ロシアから北海道を防衛するため北海道の水路を早期に測量する必要を感じていた明治政府は、英側に測量家の雇上げを要請しますが、それに対して英側は、日本側測量関係者に当時英海軍が日本の沿岸測量のために派遣していた英軍艦シルビア号の測量に同行させ測量技術を教授した上で、北海道を共同で測量することを提案します。

日本側はこの提案を受諾。1870（明治3）年6月、柳を長とする測量チームを軍艦第一丁卯で英軍艦シルビア号の測量に同行させます。南紀の測量で英側の技術を学んだ後、1871（明治4）年1月にかけて、瀬戸内海の塩飽諸島を独自に測量。英軍艦シルビア号の測量成果と照らし合わせた結果、正確だということで英側の称賛を受けました。

その後、同年3月から柳を艦長とする軍艦春日は、英軍艦シルビア号とともに北海道沿岸の港湾測量を分担して実施しました。これは、英側が日本に港湾測量を任せられると判断していたことを示します。北海道からの帰途、軍艦春日は宮古湾や釜石湾を単独で測量、これが翌年8月（旧暦）海軍水路部門のみによって作製された最初の海図「陸中国釜石港之図」として結実します。

また、紀州藩出身の大後秀勝が軍艦春日に同乗し、英側から海図製図法の教授を受けました。その後も、英側から製図法を学んだ大後は、幕府お抱えだった狩野派の絵師を雇用し、製図法を研究させました。

1871（明治4）年9月水路局が創設され、1877（明治10）年頃から航海・海図の用語体系の確立、海図を作成する際の構成や基準、記号などを定めた海図式の整備に努め、作成する海図も港湾図からより広範囲の海岸図に移行していきます。1879（明治12）年には現在の水路通報のはじまりとなる「水路報告」が発行開始、1885（明治18）年に日本沿岸の水路誌『寰瀛水路誌』第一巻が発刊されます。

こうして日本は自前の水路測量及び海図発行体制を確立していったのです。

幕府海軍の測量・製図法はオランダ式だったけど、明治海軍はイギリス式に転換したことになるね！



柳橋悦は長崎海軍伝習所出身だし、幕府海軍からは明治政府には、伴鉄太郎、塚本明毅、荒井郁之助などが出仕して海図／地図作製に関わったよ。幕府時代の基礎があったことも明治政府が急速に測量技術を発展させた背景にあるね。



小冊子「人物と機関」
陸軍参謀局から
陸地測量部へ



小冊子「人物と機関」
柳 橋悦



小冊子「人物と機関」
小菅智淵



小冊子「人物と機関」
シルビア号

堺事件

— 歓迎されなかった外国船による沿岸測量 —

1868（慶応4）年2月、仏艦デュプレクス号が堺港の測量を行う間、上陸していた仏水兵と土佐藩士の間で銃撃戦が発生し、仏水兵11名が死亡した事件。土佐藩士20名が切腹（うち9名は助命）、土佐藩は多額の賠償を支払いました。衝突の原因の一つには、デュプレクス号が堺港深く測量を行っていたことに土佐藩士が憤慨したことがあるという説もあります。

英軍艦シルビア号は1868年2月に日本に到着して測量を実施したけど、一部の地元の人々から食料提供を断られるなど、外国艦による測量への地元の目はまだまだ厳しかったよ。それが日本政府との協力を進めた動機の一つになったよ。



※この章は、今井健三「明治初期海図の製図法について：西洋地図学との出会いとその導入をめぐって」『東京大学史料編纂所研究紀要』第24号（東京大学史料編纂所、2014年）並びに今井健三「国内有数の海図群の発見とその意義」及び鈴木純子「『赤門書庫旧蔵』の海図群：概要と特色」杉本史子編『近代移行期歴史地理把握のタイムカプセル「赤門書庫旧蔵地図」の研究』（東京大学史料編纂所、2015年）などを参照して作成しています。

1 明治初期

地図
26

やなぎ なら よし
柳 檣 悦

「塩飽諸島沿岸測量観測野帳」

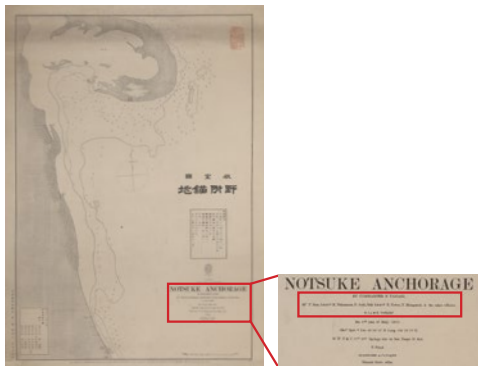


所蔵:海上保安庁

1870 (明治3) 年の塩飽諸島の測量成果として我が国初の水路測量原図「塩飽諸島実測原図」が翌年完成しましたが、1872 (明治5) 年の火災で損傷し、関東大震災により焼失してしまいました。この図を作成するための基礎資料となったスケッチブックが海上保安庁海洋情報部に現存し、これが唯一、当時の測量作業の片鱗を伝える貴重な資料といえます。

地図
27

日本海軍水路局「根室国野附錨地」
(海図第2号) (1872年、1878年再刻)

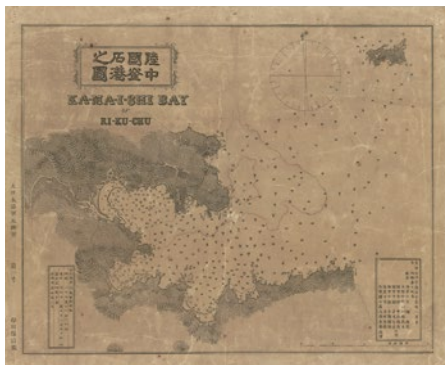


所蔵:東京大学史料編纂所 71.3×52.2cm

海図第1号は以下に記載する「陸中国釜石港之図」(地図28)ですが、日英共同で行われた北海道の港湾測量の方が先に行われています。この時の野付錨地の日本側の測量のデータは上の日本側の海図だけでなく、当時の英側の海図第991号 Japan, Anchorages on the East coast of Yezo (1872年)でも活用され、測量が柳らによるものであることは同英国海図に記載されています。

地図
28

海軍省水路局「陸中国釜石港之図」
(海図第1号) (1872年)

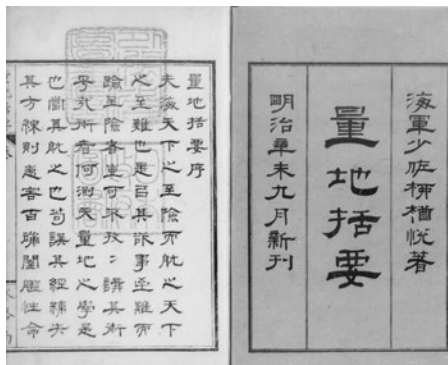


所蔵:海上保安庁 29.7×36.5cm

軍艦春日は、1871 (明治4) 年の北海道沿岸の測量からの帰途、宮古湾や釜石湾を単独で測量、これが翌年8月 (旧暦) 明治海軍初の海図「陸中国釜石港之図」として刊行されます。

文書
4

柳 檣 悦
『量地括要』 (1871年)



所蔵:国立国会図書館

1871 (明治4) 年、柳がまとめた水路測量の教科書。明治4年5月から10月にかけて実施した北海道各地の測量経験に基づいて水路測量技術を解説し、必要な数学根拠を和算記号を用いて説明した測量の大綱を示したものです。

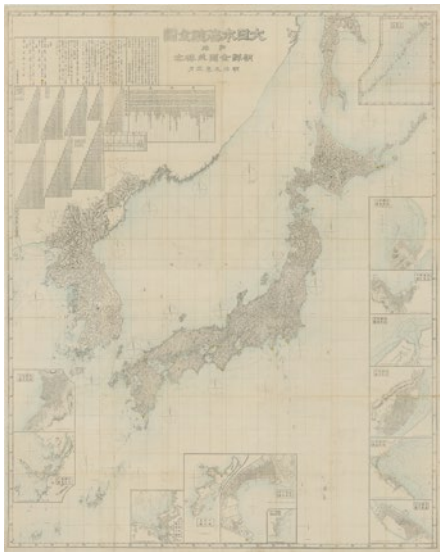
2 明治9～17年頃

地図
29

おお じり ひで かつ

大後秀勝「大日本海陸全図：聯接朝鮮全國並樺太」(1876年)

れん せつ ちょう せん ぜん こく ならびに から ふと



当館蔵 172×137cm

海軍省水路寮で海図製図の実質的な責任者であった大後秀勝が日本本土と琉球・小笠原との位置関係や、隣国との境界の状況を示す必要があるとして発行した地図。

「水路寮の経緯度表に基づき、近代的海図と陸図の統合を目指したという点で画期的」⁽¹⁾と評価されています。

その一方で、「海洋語彙の偏在が見られ」「統一した用語体系による記述になっていない」とも指摘されています。⁽²⁾

1877(明治10)年、各国の海洋知識を比較して考察した『水路提要』では航海・海図用語の体系を構築しようと努力しています。

その後海軍省水路局は、1882(明治15)年に『日本海軍水路局海図式』を刊行し、日本海図の構成、規則、基準、記号などを定めた海図式が確立します。

(1) 杉本史子「第5章 可視化された首都と政体：近代的海図と船艦の19世紀」 同「絵図の史学：『国土』・海洋認識と近世社会」(名古屋大学出版会、2022年)。

(2) 同上。



小冊子
「日本の島々の
認識の変遷」



小冊子「人物と機関」
大後秀勝

地図
30

海軍省水路局「日本中土南岸自東京海湾至和泉海」(海図第111号)(1884年)



所蔵：東京大学史料編纂所 75.7×117.8cm

1884(明治17)年に刊行されたこの海図は、「各種の大縮尺海図をもとに縮小編集された海図で実質的な海図作製技術水準に到達した成果品」⁽³⁾と評価されています。

(3) 今井健三「海図の歴史—表現方法の変化と管理体制」杉本史子編「近代移行期歴史地理把握のタイムカプセル」[赤門書庫旧蔵地図]の研究](東京大学史料編纂所、2015年) 146頁。



第五章

外国の地理情報の収集へ — 朝鮮半島を例にして — ※

朝鮮半島は、日本が「開港」し、海図情報の共有に参加した後も、東アジアでは最後に残された海図の空白地帯でした。

海岸部については、東海岸はプロトンやプチャーチンの測量船の活動により把握が進んでいましたが、海岸が入り組み、島が多く、干満の差が大きく潮流が速い西海岸や南海岸については未測量の部分が多くありました。さらに、内陸部についてはほとんど情報はありませんでした。

朝鮮は1866年のフランス艦隊との衝突（丙寅洋擾）、1871年のアメリカ艦隊との衝突（辛未洋擾）など、欧米諸国に対して外交・通商関係を築くことをあくまで拒否していました。

明治政府は、維新後、条約に基づく近代的な国際関係として朝鮮王朝との関係を再構築しようとしたのですが、伝統的な江戸時代の日朝関係を維持したい朝鮮側はこれを拒否します（書契問題）。

明治政府は、伝統的及び欧米が調べた朝鮮地理情報を収集し、さらに、日朝交渉の中で、測量船を朝鮮沿岸に派遣、測量を行います。そのような中で、1875（明治8）年、日朝が軍事衝突をした「江華島事件」も発生しました。

同事件後、朝鮮側でも対日関係の改善を望む機運が醸成され、交渉の結果、1876（明治9）年、日朝修好条規が締結されます。日朝修好条規では、釜山に加え、2港を選び開港することとなるとともに、第七款で、「朝鮮國ノ沿海島嶼岩礁從前審檢ヲ經サレハ極メテ危險トナスニ因リ日本國ノ航海者自由ニ海岸ヲ測量スルヲ准シ其位置淺深ヲ審ニシ圖誌ヲ編製シ兩國船客ヲシテ危險ヲ避ケ安穩ニ航通スルヲ得セシムヘシ」と定め、航海の危険を避けるために日本側が朝鮮沿岸の測量を行うことが可能となりました。

その後、1877（明治10）年の花房義質による交渉を踏まえて、1878（明治11）年から、開港場の選定のための軍艦天城による朝鮮の海岸測量が本格化します。

こうした取組を通じて、次第に朝鮮の沿岸の地理情報が明らかになっていきました。そして、これらの測量の成果は海図にまとめられ、国際的に共有されました。

地図
29

大後秀勝「大日本海陸全図：聯接朝鮮全國並樺太」（1876年）

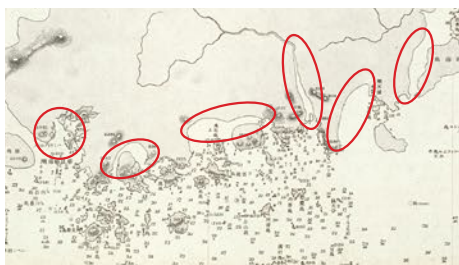


当館蔵

朝鮮半島南部部分。朝鮮半島南西部が空白になっており、情報が不足していたことを示しています。

地図
31

海軍省水路局「朝鮮全岸」（1882年）



所蔵：国立公文書館

海軍の努力にもかかわらず、この時点でもまだ朝鮮沿岸には多くの未測量地（赤で囲んだ部分など）が残されていました。背景の一つには朝鮮側の不協力もありました。

※この章は、小林茂編「近代日本の海外地理情報収集と初期外邦図」（大阪大学出版会、2017年）の小林茂・岡田郷子・渡辺理絵・鳴海邦匡「第2章 東アジア地域に関する初期外邦図の編集と刊行」及び小林茂・岡田郷子・鳴海邦匡「第3章 19世紀後半における朝鮮半島の地理情報収集と花房義質」を主に参照して作成しています。

1 伝統的朝鮮地理情報の収集

地図
32

海軍省水路寮「朝鮮全図」 (1873年)



所蔵:国立公文書館 61.4×43.4cm

1872(明治5)年に花房義質を長とする使節団を釜山に軍艦春日により派遣した時に入手したもの。欧米の海図では、朝鮮の地名の記載が少ない点を補うため作製されたと思われます。鴨緑江・豆満江の扁平な図形や于山島が鬱陵島の西にあるなど、朝鮮前期の地図の特徴を示しています。

地図
33

『朝鮮国地理図』(1872年)

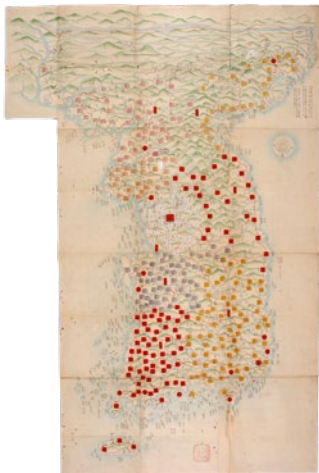


所蔵:国立公文書館

元々は、朝鮮出兵(文禄年間)の際に九鬼氏の家来が朝鮮で模写した絵図。三田藩士族が兵庫県を通じて太政官に献呈したのに対し、太政官はこれに報酬金を下賜しています。画像はこのうちの「八道総図」。

地図
34

「朝鮮国全図」 (瀬脇寿人・校、金鱗昇・音)



金鱗昇は、当時ウラジオストクに在住していた朝鮮人で在ウラジオストク貿易事務官として赴任していた瀬脇寿人が金の助けを得て作製した地図。

小冊子「人物と機関」
瀬脇寿人

所蔵:国立公文書館

地図
35

「原板朝鮮全図之写」(1876年)



漢城駐在中の宮本理事官が朝鮮政府から入手した図をベースにしたもの。于山島が鬱陵島の東方そばの小島と表現されているなど朝鮮後期の地図の特徴を持っています。

所蔵:国立公文書館

② 欧米が収集した朝鮮半島地理情報の収集

地図37や地図38など日本が作製した朝鮮半島の地図や海図は、日朝修好条規のための日朝交渉の際に日本側から朝鮮側に贈呈されています。これは、「万国公法的な世界観に基づき、日本側が持っている地理情報を開示することによって、朝鮮側に地理情報の開示を要請するという意図で行われた可能性が高い」⁽¹⁾と指摘されています。

(1) 小林茂「外邦図：帝国日本のアジア地図」(中央公論社、2011年)51頁

地図
36

Carte de la presqu'île de Coree(1867年)

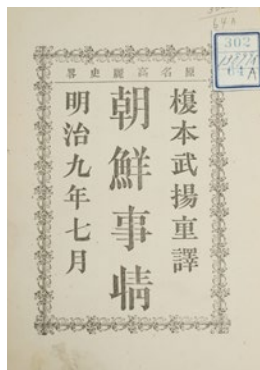


所蔵:国立公文書館

1875(明治8)年、お雇い仏国人ガストン・ガリーは丙寅洋擾の際にローズ仏海軍司令官の命で作製した仏海図類を明治政府に献納しました。画像は巨文島の海図。

文書
5

著者:シアーレル・ダレー(仏)／
えの もと たけ あき
訳者:榎本武揚『朝鮮事情』(1876年)



所蔵:国立公文書館

1874(明治7)年のフランス神父ダレーの『朝鮮教会史』を榎本武揚が抄訳したもの。当時、榎本の外交顧問を務めていたポンペにオランダ語に抄訳させた上で、榎本が和訳しています。

地図
37

陸軍参謀局「朝鮮全図」及び
同附録(1875年)



海岸線や経緯度は英米の海図、内陸部については朝鮮や中国の地図に拠って作製された地図。金鱗昇の助言も参考にされました。



小冊子
「日本海の島々の
認識の変遷」

所蔵:国立公文書館
139×98cm

地図
38

海軍省水路寮「朝鮮東海岸図」
(海図第54号)(1875年)



ロシアのプチャーチン提督率いるパルラーダ号の測量に基づき1857年に刊行された海図を海軍省水路寮が翻訳したもの。



小冊子
「日本海の島々の
認識の変遷」

所蔵:国立公文書館

3 朝鮮開国と海図作製

地図
39

海軍省水路寮「朝鮮国釜山港」(海図第60号)



所蔵:海上保安庁(『大日本海岸実測図』より)

1875(明治8)年、釜山で日朝政府間の交渉が行われる際に、交渉支援と測量を目的に軍艦雲揚と第二丁卯が派遣されました。この海図にはその際に行われた測量に基づく旨が記載されていますが、発行日はなぜか測量前の同年3月31日とされています。⁽¹⁾

『大日本海岸実測図』は、既存の海図をまとめて合冊したもので、『水路部沿革史』によれば、1879(明治12)年にドイツ軍艦に、1880(明治13)年に宮内庁に寄贈されたことが記載されています。

『大日本海岸実測図』は現在、海上保安庁海洋情報部、国立国会図書館及び国立公文書館に残されていますが、収録されている海図には若干の違いがあります。

(1) 矢吹哲一朗「日本による近代海図刊行の歴史(明治5～18年)」『海洋情報部研究報告』第58号(海上保安庁、2020年)31-32頁。

地図
40

海軍省水路寮「朝鮮国西岸／済物浦泊地／略測図」(海図第71号)



所蔵:国立公文書館

江華島事件後の日朝交渉のために黒田清隆などが江華島に派遣された際に朝鮮に同行した軍艦孟春によって行われた測量に基づき作成された海図です。

略測図であり、明治9年2月に測量した経緯度や潮汐などは実際とは異なります。通常は、略測図刊行後に正しい値に修正されます。

4 朝鮮開国後の交渉と海図作製

地図
41

はな ふさ よし もと
花房義實「復命概略別記第一」の「開港ノ事」の木浦の見取図（1877年）



1877（明治10）年の花房義實駐朝代理公使による対朝鮮交渉のための朝鮮訪問の際に作られたもの。全羅南道（朝鮮半島南西部）の木浦は開港先の候補の一つであったため測量が実施されました。花房の回顧録にはこの地域は地形が入り組んでいる上に利用可能な海図がないため、木浦の搜索に苦勞した旨が記載されています。



小冊子「人物と機関」
花房義實

所蔵：外務省外交史料館

地図
42

海軍省水路局「朝鮮国／元山津」及び
「朝鮮国／新浦錨地」（海図102号）（1879年）



所蔵：国立公文書館

1878（明治11）年5～6月の軍艦天城の測量成果に基づく海図。この時の航海日誌には定期市が開かれるなど1880（明治13）年に開港されることになる元山の繁栄ぶりが記載されています。

元山港近くの松田湾は、ロシアの提督ブチャーチンによってラザレフ港と名付けられ、ロシアが軍港とすることを狙うなど戦略要地として各国から注目されていました。

地図
43

海軍省水路局「朝鮮沿岸諸錨地」（海図133号）（1881年）



所蔵：東京大学史料編纂所 51.6×36.6cm

1880（明治13）年の軍艦天城による朝鮮沿岸の測量成果も反映されています。



小冊子
「日本海の島々の
認識の変遷」